

挨拶

設立20周年を迎えて

河田 恵昭

ただいま、ご紹介にあずかりました日本自然災害学会会長の河田でございます。

まず我が国の防災研究におきまして、自然災害総合研究班という組織がありましたが、これが果たしてきた役割はきわめて大きいと考えています。自然災害科学の研究を総合的に行うために、全国の大学等に分散している、広い学問分野にわたる研究者が参加できる全国的な組織が必要となってきたわけではありますが、その契機となりましたのは、1959年の伊勢湾台風・高潮災害でした。その翌年、当時、福井大学学長であった故・長谷川満吉先生が、国立大学協会を通じて全国に呼びかけられ、大学における災害科学関係の研究者による研究連絡組織としての災害科学総合研究班が発足いたしました。当時のメンバーはわずかに30名程度だったといわれております。

1963年には、文部省の科学研究費特定研究の中に、自然災害科学の研究領域が設置され、計画的・組織的に研究が進められるようになりました。そして、総合研究班が研究の企画調整・総括の役割を果たすようになりました。その後、特別研究、重点領域研究という範疇に変わりましたが、総括班としての機能を十分果たしてまいりました。

この過程で、当初より科学研究費による総合研究班の運営の不安定さが指摘され、自然災害科学という学際的研究領域を対象とした学会設立の気

運が高まってまいりました。そこで、名古屋大学の故・松沢勲先生を初代会長とする自然災害科学学会が発足いたしました。設立当初の会員数は100名を少し超えた程度でした。したがって当学会の設立後、約10年間は財政的に運営がきわめて困難であり、当時約1,700名の研究者で構成されておりました自然災害総合研究班と表裏一体に運営され、特に財政的な支援を受けて育てられてまいりました。

本年第38回を数えております、自然災害総合研究班が主催する「自然災害総合シンポジウム」の開催に合わせて、当学会の年次講演会が開催されている由縁は以上のような理由があるからでした。その総合研究班が1999年12月に発展的に解消され、40年の歴史に幕が降ろされました。これにかわって現在、「自然災害科学研究協議会」が全国共同利用研究機関でございます京都大学防災研究所に設置され、新しい組織として出発しております。

このように当学会は自然災害総合研究班に育てられ、20年を経過してやっと名実ともに一人立ちができたと言えるでしょう。この研究班の解消とともに、英文論文集 "Journal of Natural Disaster Science" が当学会の正式の機関誌として継続発行されているのはご存知のことと存じます。

本年設立 20 周年を迎えるにあたり、本日の記念シンポジウムの開催をはじめ、防災教育特別委員会の発足、ハザード 2000 国際賞の創設、防災事典の刊行、学会活動の活性化などが企画・運営されております。

この機会に私たちの学会が、多くの先輩諸氏の汗とご努力によって育てられてきたことに対し改めて感謝しますとともに、心を新たにして 21 世紀の防災研究に使命感を持って向かうことをお約束し、ここに開催のご挨拶といたします。

最後にこのシンポジウムの開催にあたり、ご尽力を賜りました関西大学の関係者のみなさま、それから開催準備を担当されました NPO 法人大規模災害対策研究機構のみなさまにお礼を申し上げます。簡単ではございますが、ご挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。